

学校名 かながわけんよこはましりつまかどしょうがっこう  
神奈川県横浜市立間門小学校 校長名 石川 純一

所在地 〒231-0825 神奈川県横浜市中区本牧間門 29-1

TEL 045-622-0005

FAX 045-622-5949

E-mail y3makado@edu.city.yokohama.jp

URL www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/makado

### 1 研究主題

「自ら考え、ともに学び合う  
子どもをはぐくむ健康教育」  
ー子どもが主体的に課題を  
解決する学習を目指してー

### 2 研究の期間

昭和5年 ～ 現在（継続）

### 3 研究の目的

本校では、昭和5年に創立して以来、長年にわたり体育科を中心とした健康教育に取り組んできた。昭和9年に「健康教育に関する全国研究大会」を開催したことを皮切りに、昭和12年には世界大会での発表、昭和17年には神奈川県の指定を受けた健康教育発表会を開催し、健康教育推進校としての礎を築いた。

戦後、「体力向上と体育科指導法の研究」、「健康増進を図るための身体を動かす技術」、「学習内容の改善と効率的な指導法」、「子どもが運動する喜びを味わうための指導」、「自ら健康づくりに取り組む子どもの育成」など、時代やニーズに即した研究を推進し続け、平成26年度で62回目の健康教育発表会を迎える。

平成22年度までの研究では、体育科において身に付ける力を明確にし、その確実な習得を目指して子どもの学びのPDCA各過程を成立させるとともに、その実現状況を教師がしっかり見とって、効果的な手立てを探りながら授業改善を行ってきた。その結果、運動領域では、できるようになること（技能）とわかって活用すること（思考・判断）の双方が充実し、集団的活動や身体表現などを通じたコミュニケーション能力や主体的な学習態度がよりよく育つことが明らかになった。

保健領域においては、より子どもが実感を伴って実践化を図っていけるように、学習指導要領の内容を踏まえて価値ある学習材を吟味して加え、本校独自の総合的な学習単元「いのち単元」を構想した。子どもの学びや意識の流れに沿った有効な手立てを模索し、特にC（評価）、A（改善）の過程を学びの質が高まる機会ととらえ、手立ての工夫をすることが有効であることが明らかになった。

研究の過程で、子どもが生涯にわたって運動を生

活に取り入れ、健康的な生活を営むことに結び付けるためには、いつ、何を、どのように身に付けることがその実現につながるのかを明らかにする必要がある。そこで、小学校での6年間の教育課程に着目し、系統性・連続性を考慮した授業を実践しながら、子どもが自ら課題解決的な学習を展開できるような研究を進めることにした。

### 4 研究の方法・実践内容

本校では、健康教育の2つの大きな柱を設定している。一つ目が、全学級で行われる「授業研究会（各学級年3回）」、二つ目が体力向上に直結する運動を行ったり、具体的な健康にかかわるテーマに則って、全校児童が主体的に活動したりする「すこやか活動」である。この2つの実践を通して研究を進めてきた。



<平成23年度、24年度>

「授業研究会」では、「器械運動」、「ボール運動」、「陸上運動」の3つの運動領域と、本校独自に開発した「いのち単元」に重点を置いて研究を進めてきた。

教職員は、いずれかの領域部会に属して研究を進めるが、年度序盤（夏季休業前）には、学年での学習内容、指導内容についての共通理解を図るため、低・中・高学年ブロック部会を設定し、担任している学年のメンバーで授業研究部会を設けて議論する。クラスを担当しない専科教諭や養護教諭、栄養教諭については、学習内容に応じて学年ブロックに加わる。夏季休業明けには、領域ごとのブロックで系統性を考慮しながら内容を吟味して授業分析を行い、授業を改善していった。

「すこやか活動」では、火曜日と金曜日の休み時



間（30分間）を利用した全校での運動活動「すこやかタイム」を実施した。

種目は、校庭で行う持久走、敷地外の地元ランニングコースを利用した持久走、クロスカントリー、長なわ跳び、短なわ跳び及びフープ操作、一輪車および竹馬の操作の6種目とした。年度前半には全児童が共通して各種の運動を体験できるようにローテーションを設定し、年度後半には、児童が自分の課題に即して種目を選択できるようにした。

「学校すこやか会議（学校保健委員会）」では、日本学校歯科医会「生きる力をはぐくむ歯・口の健康づくり推進事業」の指定校として「歯みがき」をテーマにした取組を全校で行い、本校学校歯科医の指導の下、各クラスでの取組や給食後の歯みがきタイムを設定して継続的に取り組んだ。また、親子歯みがき教室を開催して保護者にも正しい歯みがきの仕方を啓発し、家庭とも連携して取組の充実を図った。

＜平成25年度～現在＞

「授業研究会」においては、各運動領域における内容の系統性が明らかになってきたことで、さらに研究を深化させることをねらい、より具体的な種目（器械運動の「鉄棒」および「跳び箱」、ボール運動の「ゴール型」、陸上運動の「跳」）に絞って研究を進めた。保健領域では、より子どもが実感的に理解し、実践化できるような学習材の開発を進めた。

「すこやか活動」については、24年度の体力テスト校内結果「投能力」において、全学年が横浜市平均値に及ばなかったという結果を受け、「すこやかタイム」の種目の変更（敷地外持久走→連続ボール投げ）を行った。また「学校すこやか会議」のテーマを「姿勢」に変更し、内科校医等の指導・助言を仰いで各クラスでの取組を進め、共有を図ったほか、定着した親子歯みがき教室については、歯科衛生士を招いて内容を充実させた。

## 5 研究の成果

「授業研究会」では「身に付ける力」を基にした実践を重ねてきたが、さらに学習内容の系統性に視点を当てた「身に付ける力」を再考したことにより、下学年で学ぶべき内容をより明確化することにつながった。また、長年の研究で誕生した一単位時間の最初に行う準備・慣れの運動としての位置づけである「間門セット」は、改善を繰り返して充実したものになってきた。主運動に必要な易しい動きを吟味して構成し、子どもが毎時間繰り返し経験することで、基礎的・基本的な動きの習得の一助になっている。

課題解決的な学習においては、子どもが運動と出会ったばかりの学習の前半には具体的な課題を提示し、どんなことに挑戦すればよいかを明確にすることが効果的であることが明らかになった。そして、

学習の中盤以降では、個がそれぞれの課題設定を基にした追究活動ができるように、複数の課題を包含しやすいものにすることが有効であることがわかってきた。

さらに、教師が単元全体を見通し、学びが進むにつれて子どもの課題がどのように発展していくかを想定して単元を進めていくことによって、意図的、効果的な手立てを考えることができることがわかってきた。その中で特に有効なのが、前時間での自分自身の動きを根拠に次の課題を設定して解決に当たること、より必要感に基づく学習に展開していくことがわかってきた。つまり、子どもが主体的に課題を設定して解決していく学習サイクルを築くことが、よりよい学習につながり、学習内容を獲得していくことに直結するということである。

「すこやか活動」では、体力テストの結果をもとに「すこやかタイム」の種目に、投能力を視点にした運動を取り入れ、学校としての課題解決を図ってきた。特定の児童の取り組み方および投能力データを追跡したところ、短期間での投球動作の改善や記録の向上がみられ、徐々にその結果が表れてきた。

「学校すこやか会議」をきっかけとした「歯みがき」での取組に関しては、校内での歯みがき検査の結果が全学年において向上（AおよびB<sup>o</sup>が全体の95%）し、「平成25年度神奈川県よい歯の学校」として表彰を受けた。

## 6 研究の意義、発展性

基礎的・基本的な知識・技能を明らかにして指導することはその定着への第一歩であるが、学習の主体である子どもの存在やニーズに配慮せず、画一的な指導を行っていたのでは、子どもが運動の特性にふれて楽しむことには結び付かない。本校では、子どもが自ら学び、知識・技能を習得していくと同時に学び方も身に付けていく「課題解決的な学習」を通してこそ、生涯にわたって運動好きな子どもを育てることにつながるという仮説のもとに授業改善に取り組み、検証を重ねてきた。また、「できるようになる」ことが運動の特性にふれ、本来の楽しさを味わうことも明らかであるから、本校の「すこやか活動」の意義も大きいものと自負している。今後さらに、子どもの姿に視点を当て、その変容をもって改善していくことにより、生涯にわたって運動と豊かにかかわり、自己の生き方を創る子どもを育成できるものと考えている。

